

巻頭言

光陰矢の如し

藤田保健衛生大学医学部臨床検査科

石井潤一

巻頭言でお話しをするのは大先輩だけだと思っていましたが、今回このような機会を与えて頂き光榮に思うと同時に、自分も年を取ったのだと考えさせられました。私は昭和57年に愛媛大学医学部を卒業し、第二内科に入局しました。その後大学、愛媛県立中央病院や喜多医師会病院で研修し、日和田邦男教授のご好意により、平成1年より藤田保健衛生大学医学部循環器内科にお世話になっております。光陰矢の如し、本当に時の経つのは早いもので、私が帰郷してから22年が過ぎようとしています。最近、私も国府達郎教授が言われていた「同じ釜の飯を食った仲間」の良さが理解できる年代になり、毎年同窓会に出席するのを楽しみにしています。さらに、今年の4月から縁あって一人娘が愛媛大学に入学し、私の後輩になり、同窓会をより一層身近に感じております。本稿では最初に藤田保健衛生大学を紹介し、次に、第二内科同窓会に対する私見を述べさせていただきます。

藤田保健衛生大学病院は医師、看護師・保健師、臨床検査技師、診療放射線技師、リハビリテーション療法士、臨床工学技士や診療情報管理士を養成する医療系総合大学の教育病院です。その所在地は、桶狭間古戦場で有名な愛知県豊明市（人口：約7万人）であり、名古屋市に隣接しています。病床数は1505床（一般1414床、救命救急センター61床、精神科30床）であり、本邦第1位の病床数です。特定機能病院としての一端を担う一方、豊明市の地域社会に密着した市民病院的性格を併せ持っています。そのため“患者様の目線で優しく温かい医療”を大学病院の基本理念としています。

多くの私立医科大学は、その使命を臨床の実践と言った臨床的な目標のみに置きがちです。しかし創立者藤田啓介先生は“良き臨床医を作る”のみならず、豊かな人間性を活かしたオリジナリティを意味する“独創一理”を建学の理念として掲げ、大学としての使命が、最先端の医学を追求し、解明することにある点を強調しています。

もう一つ、藤田啓介先生が医師に対する戒めとして残されたのは、「我ら、弱き人々への無限の同情心もて、片時も自己に驕ることなく医を行わん」という言葉です。今から40年以上前に言われていますが、将来にわたっても通用するコンセプトです。

医局の人材育成にはグローバリゼーションとローカリゼーションの2つがあります。本邦を代表してグローバルに活躍しようという外向きの人材育成も大事ですが、地域で地道に診療を行う内向きの人材育成も大切です。医局としては両者が両輪となって相互に交流し合うのが理想的です。藤田保健衛生大学の医局員は開業医の子息が多いことから、後者への実践意識が強いように思われます。早期開業は医局と関連病院の慢性的な医師不足の要因になっております。もちろん、グローバルを目指すにしても地域にしっかり根をおろした活動をしていることが肝要です。

研修医不足は藤田保健衛生大学にとっても死活問題になっております。当大学病院で研修しなかった卒業生は研修終了後に母校に戻ってくることは少なく、名古屋大学の医局に入局してしまうことが多いという認識も持っております。そのため、研修医の教育指導や管理を行う専門の部門として研修センターをオープンし、臨床研修プログラムには人気の高い一般内科（総合内科）や救急部を前面に出しています。さらに、若い世代には過重労働のイメージは嫌われますので、仕事過多にならないように保護しています。臨床系教授会で医師の満足度調査の結果が公表された時に、研修医以外の医師は仕事過多を強く実感していましたが、研修医は適切な仕事量であったという認識が大部分でした。確かに研修医は夜間の救急診療に従事した翌日には帰宅できます。しかし、指導医はそのまま引き続いて診療を行っています。病院の医師で一番労働条件の良いのが研修医であるという事実は初期臨床研修義務化の弊害と言えるでしょう。

次に、第二内科同窓会に対する私の印象を述べさせていただきます。内情を十分に把握しているわけではありませんのでピントが外れていたらご容赦下さい。あくまでも私見です。第一点は、「天は自ら助くる者を助く」という言葉の実践をより体感できることです。例えば、住元巧先生の喜多医師会病院院長への就任、西山誠一先生の三島医療センター長への就任、風谷幸男先生の県立中央病院循環器センター長への就任、濱田泰伸先生の広島大学大学院保健学研究科心身機能生活制御科学講座教授への就任など挙げきれないほどの昇任の話題に触れることができます。これは医局の人材育成のグローバリゼーションとローカリゼーションが上手に機能していることの現れです。同窓会に出席した若い先生方にはすばらしい励みになっていると思います。当然、私は藤田保健衛生大学の同窓会に毎年出席していますが、開業する先生が多いことと名古屋大学の勢力が強いため、このような祝事には余り出会いません。これからも毎年第二内科の同窓会に出席して前向きの気持ちに成れることを楽しみにしています。

第二点は、地域医療に対する医局の真摯な取り組みです。先日厚生労働省は必要医

師数実態調査の結果から、全国で2万4千人の医師が不足していることと、地域や診療科による偏在の存在を明らかにしました。しかし、実状はもっと深刻であると推察されます。研修医を集めるには第二内科だけではなく愛媛大学の全ての臨床科と関連病院が一致団結して魅力的な臨床研修プログラムを作成する必要があります。もちろん、すでに行っていると思いますが従来以上に魅力的な臨床研修プログラムに上げることが要求されています。ただし、研修終了後の入局には第二内科独自の素晴らしさを売り込む必要があります。

2009年度から医学部医学科の定員が医師不足解消のために大幅に増員されました。しかし、定員を増やしたとしても、1人前の医師として使えるようになるには、最低でも10年はかかりますので即効性はありません。定員を増やすなら、それに応じて教員を増やし待遇を改善しないと、医師の粗製乱造は避けられないでしょう。さらに医療費を抑制したままで医師の数だけを増やしても問題を複雑にするだけです。私たちが先生方と同じように現政権による抜本的な解決策を強く望んでいます。

第三点は、グローバルに活躍している点です。第三内科の若手から中堅医師は学生との会話で第二内科がグローバルに活躍していることを実感しているようです。これは国府達郎教授、日和田邦男教授や檜垣実男教授のご指導の賜物と敬服しております。先日シカゴで開催された米国心臓病学会（AHA）では檜垣実男教授はファイザーナイトの座長をされておられました。素晴らしい会であり、私も参加できて良かったと思っております。

昨年は政権交代を初めて体験し、何かが変わると期待したところもありました。特に、医療費の問題、医師不足の問題、医師の待遇改善など医療の分野では少しでも良い方向へと進んで欲しいものです。しかし、多くの人の期待に答えるということは結局はバラマキにしかつながらない現実が「指導力不足の総理大臣」の下で展開され、今後のわが国の医療を考えると暗澹たる気持ちを抱かずにはおれません。医局制度は低迷していますが、このような不透明な状況下を乗り切るには「同じ釜の飯を食った仲間」といわれる関連病院を含めた医局の結束が重要であることを強調して、稿を終えさせていただきます。



学会記

国際高血圧学会(ISH2010 バンクーバー)

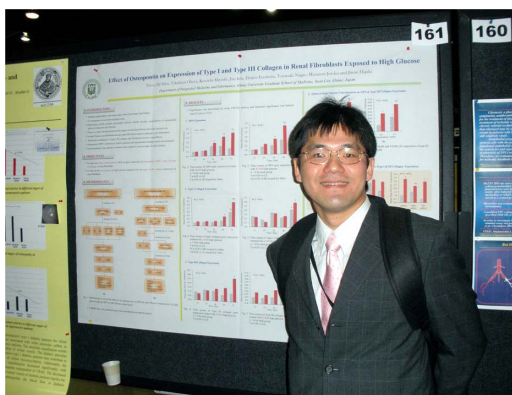
城 徳 昌 典

2010年の国際高血圧学会は冬季オリンピックが開催されたバンクーバーで開催されました。檜垣實男教授を筆頭に腎臓高血圧グループからは大蔵隆文准教授、そして榎本大次郎先生と小生とが（それぞれ長尾知明先生、Veena De Silvaさんの演題の代理発表もありました）、循環器からは鈴木純講師、青野潤先生が参加されました。檜垣教授は1日早くに出発され、大蔵隆文准教授、榎本先生と小生とが一緒に出発しました。榎本先生には当日にチケットを小生から空港で渡すようになっていましたが、榎本先生はなかなか姿を見せませんでした。出発予定時刻の20分前になりようやく榎本先生が奥様と赤ちゃんと登場しました。赤ちゃんはすっかり大きくなっていました。赤ちゃんの笑顔でちょっと癒しをもらい、無事に3人揃っての出発になりました。

羽田空港に着いて、成田空港へはリムジンバスで移動をしました。3人並んで成田行きのチケットを購入し、乗り場に並んでいる時に「満席なのでチケットの時刻を確認して下さい」とのアナウンス。確認すると、榎本先生だけ次発チケットになっていました。次発と分かった時に榎本先生が一瞬微笑んだように見えました。榎本先生は次発までの15分の間に成田まで飲めなかったかも知れないビアを嗜まれたかも…。

成田空港で改めて3人揃ったところで、搭乗手続、出国審査を済ませ、大蔵先生に誘導されるままにSAKURAラウンジへ。出発まで食事など取りつつ、一休みしました。出発してからは約8.5時間のフライトです。小生はバンクーバーに着くのが午前なので極力寝て過ごしました。

バンクーバー空港に到着後はスカイトレイン（無人電車）で市内へ向かい、ホテルでチェックイン後、学会会場へ行きました。学会会場へ到着直後には檜垣教授ご夫妻と待ち合わせをしていたかのようなタイミングで合流し、レジストレーションをした後にみんなで昼食へ向かいました。ウォーターフロントからガスタウンへ向かう途中でSteamworks Brewingというお店で、ビールを飲みながらハンバーガー、サンドイッチ、ピザなど食べました。榎本先生が『edamame』メニューに文字を見つけ、日本語のカナダでの頑張りが確認されました。



もちろんおいしく頂きました。料理のボリュームはやはりアメリカン(カナディアン?)サイズでお腹は満杯。周囲のテーブルに座っているお客さん達の体型を見て納得。こちらもボリューム満点!その後ガスタウンを散策し、Steam clockとHohn Deighton像で記念撮影した後、トロリーバスでバンクーバーを一巡しました。フライトでの疲れにビール、バスの揺れが加わり、たちまち別世界へ…。途中から蘇り景色を満喫することができました。一旦、ホテルに戻り小休憩の後、Welcome Receptionに参加し、バンクーバーでの第1日目を終了しました。

翌日からは学会に参加しましたが、ベルリンで行われた前回のISHに比べると賑わいが控え目でした。様々なところで演題が出ていたのは、頸動脈洞に電気刺激を行うことで血圧を下げるという治療でした。そこまでして血圧を下げないといけないものかという気もしましたが、降圧薬で下がらない症例でも血圧を下がるようで、印象的でした。

小生のポスター発表はプレゼンテーションがなかったので、ポスター前で質問などが来るのを待っていましたが、小生のポスターに限らずプレゼンテーションの無いポスターでは質疑がなされている姿はまばらでした。コンゴから参加していた方が小生のポスターを眺めに来てくれたので、声を掛けてみると、コンゴでは感染症がかなり多いので炎症性サイトカインという言葉に惹かれたということでした(小生の演題名は『The Association between Plasma Homocystein and Inflammatory Cytokines in Patients with Essential Hypertension』)。東北大学の伊藤教授による腎臓での糖脂質代謝の講演会では、日本での講演会とは異なるフランクなムードの中、スタチンによる腎保護などの話題を楽しく拝聴しました。

学会参加の最終日の午後には、榎本先生とサイクリングをしました。すぐに見つかるだろうと思っていたレンタサイクル屋がなかなか見つからず、スタンレーパークにかなり接近したところでようやく発見しました。ノースバンクーバーにあるキャピラノ吊橋(全長137m、高さ70m)まで行こうと出発したのですが、自転車屋の店員さんが勧めてくれた海岸沿いのサイクリングロードを走っていると、サウスバンクーバーからノースバンクーバーに渡る橋には上がれないルートでした。仕方なく、スタンレーパークを一周してから(苦勞の甲斐あって、サイクリングロード沿いのビーチでトップレスで日光浴をしているおねーさまに遭遇できました)



改めてノースバンクーバーへの橋（ライオンズゲートブリッジ：1,517.3m、主塔の高さ111m）を目指して走り始めましたが、これがなかなかの急坂であり途中で休憩が必要になるぐらいでした。対岸まで渡った後はキャピラノ吊橋まで再び急坂でした。キャピラノ吊橋では駐車場の隅の方に申し訳程度の自転車置き場がありましたが、止めてある自転車は1台もありませんでしたが、そこまでの道程を考えると自転車がいないのも頷けます。吊橋は人が歩くとユラユラと左右に揺れはするもののまあまあしっかりした橋でした。スリリングさの点では祖谷かずら橋の方が足元の悪さで上回るように思いました。キャピラノ吊橋は川面までの高さや橋の長さは大きく晴天でもあり眺めも良かったです。橋を渡った先には遊歩道がかなり広範囲にあるのですが、時間の都合で引き返しました。夜には檜垣教授からチケットをお譲り頂いたGalaに参加しました。現地の有名な方々の歌、踊り、そしておいしい食事を頂きました。大蔵先生によると、例年は参加型の出し物で、学会参加者も踊りに参加することも多いとのこと、出番が回ってこないかウキウキドキドキしながら見ていましたが、出番は回ってくる事無く終了になりました。

帰国日にはあっという間に時間が経ちます。みんなでスカイトレインに乗って空港に向かいました。その運賃がなんとも不思議で空港→市内と市内→空港の値段がかなり違うのです。間違いでないかと幾度か確認しましたが、間違いではありませんでした。バンクーバーから成田→羽田→松山と移動しましたが、羽田空港で夕御飯を食べました。1週間ぶりの日本の食事はおいしかったです。松山に着くともうすっかり夜になっていたの、すぐに眠ってしまいました。

バンクーバーは雨季に変わっていくシーズンでもあり天気は様々でした。すっきりしない天気が多いとも聞いていましたが、雨が降っても小雨程度で快適に過ごすことができました。

オリンピック開催地を追いかけているわけではないのだと思いますが、次回のISHはシドニーで行われます。バンクーバーではオリンピック後間もないこともありオリンピックグッズがまだ販売されていましたが、さすがにシドニーにはもう無いかなと思います。学術的な新しい知見を得るとともに、小生の視野を広げるために（南半球にはまだ踏み入れことはありません）次回も参加できればと思っています。



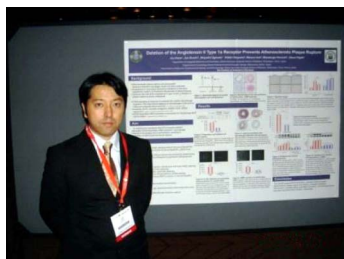
学会記

AHA(American Heart Association Scientific Sessions Conference)2010に参加して

青野 潤

平成22年11月13日～11月17日にアメリカ、シカゴで開催されたAHA Scientific Sessions Conference 2010に参加させて頂きました。今回の学会には当講座の井上先生、鈴木先生、大島先生、東先生、喜多医師会病院の齋藤先生と参加しました。行きの飛行機の中では予期せぬDrコールがありAED等も出動していたので我々も手伝わなければとキャビンアテンダントに循環器専門医であることを告げ、井上先生を筆頭に現場に向かいましたが、結局、ニューヨークマラソンに参加したという白人男性が軽い脱水症状を起こしただけとのことでバイタルも落ち着いていましたので、ホッとひと安心し席に戻りました。

シカゴ到着翌日の11月14日、AHA参加初日を迎えました。シカゴの気温は朝と夜は2℃から4℃、日中は10℃くらいでしょうか。やはり日本と比べると少し寒い印象があります。会場はミシガン湖のほとりにあり、圧倒されるように大きな会場です。私の発表予定は学会後半にかたまっていたので学会前半は基礎、臨床の興味ある領域を目移りするように数多くあるセッションの中から選んで拝聴しました。印象的だったのがこのようなセッションで座長をしている先生が非常に若い（おそらく30歳代？）方も多いことです。我々も負けられないという気持ちになりました。また今回AHA Scientific Sessions 2010で口述発表させて頂く内容が、ATVB (Arteriosclerosis, Thrombosis and Vascular Biology) councilにより選出され、光栄なことにAHA期間中の11月16日にHyatt Regency Chicagoで開催されるATVB Early Career Networking Receptionに招聘して頂きました。そのレセプションで各国のEarly Careerに混じってポスター発表させて頂きました。この選抜されたトップ20のうち1演題にATVB Council Award for Outstanding Research by an Early Career Investigatorが授与されましたが、残念ながらその獲得はなりません。



した（白人女性が受賞していました）。しかし、多くの方々から質問を頂き交流を深めることが出来ました。このような機会を与えられたことを光栄に思い、また多くの先生に御指導頂いた結果であり本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。その日はレセプション終了後早々にホテルにひきあげ翌日の口述発表に備えました。

最終日11月17日、口述発表の日の朝を迎えました。午前9時から12時まで『Mechanism of Atherosclerosis : New Lessons from Mouse Models』と題して10個の演題が予定されていました。日本からの演題は京都府立医科大学の先生方と我々愛媛大学の2演題でした。朝から鈴木先生が緊張をほぐそうといろいろ本当にいいアドバイスをしてくださいましたが、それがより一層緊張を誘いました。私の同級生である稲葉先生のいう無の境地に演台にあがった時点で立てるかどうかが問題でしたが、3人、2人と発表が近づくとつれ緊張が高まってきて前演者のConclusionのスライドの頃には覚えた原稿がすべて吹っ飛んでしまいそうでした。しかし、確かに演台にあがると落ち着くことができ自分の中では今までで一番の発表ができたと思います（自分ではかなりゆっくりしゃべれていると思っていましたが、実際はやはり少し早口になっていたようです）。質疑応答は、最初の質問は聞き取りが難しく、2人の座長に解りやすく言い換えて助けて頂き、片言で答え、質問後席に戻った質問者に鈴木先生が近づき補足して頂いていました。また2人目はなんとなく聞きとれたので質問に答え、無事発表が終了しました。セッション終了後に最初の質問者に質問がうまくヒアリングできなくて申し訳ないと声をかけに行くと、いいプレゼンだったよと声をかけて頂き、名刺までいただきました。



岡山先生、檜垣教授の御支援のもと鈴木先生と二人で循環器の基礎グループを立ち上げることとなり3年目に突入しています。最初はマウスの飼育法を習ったり、マウスを繁殖させるところから始まり、また組織切片の作製、染色、ウエスタンブロッティング、PCR、マウスの手術などすべての手技を自分で行う必要があります、また未知の領域であったため苦労もたえませんでした。今回AHAというこれ以上ない大舞台で発表させて頂き、貴重な経験をさせていただけたのも鈴木先生は当然のことながら、日頃御指導頂いている檜垣教授をはじめとする第2内科の先生方、普段臨床をカバーして頂いている大木元先生をはじめとする循環器グループの先生方、これまで指導して頂いた濱田先生、松岡先生、渡辺先生、岡山先生をはじめとする関連病院の先生方、また、いつもサポートして頂いている、岩井先生、堀内教授をはじめとする第1生化学の先生方などサポートして頂いている方々のおかげであり感謝の念に堪えません。帰りの飛行機の隣の席で口をあけて爆睡する大島先生を横目にこの原稿を書いています。文章がつかない点は時差ぼけに免じてご了承頂けたらと存じます。この経験を活かし今後も日常臨床、研究に邁進していきたいと思っております。

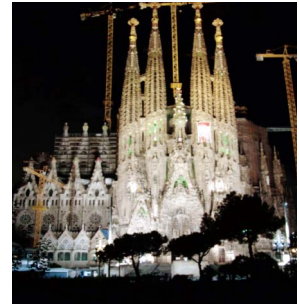
学会記

European Respiratory Society Annual Congress 2010

三好誠吾

この度、2010年9月18日から22日まで開催されたEuropean Respiratory Society Annual Congressに行き参りました。私は、昨年からの学会に参加させて頂いておりますが、あまり海外旅行へ行ったことがない私にとっては、結構楽しいイベントです(もちろん学会で勉強することがメインですが…)。特に毎年ヨーロッパの違う国で開催されるので、学会から帰ってくる頃には来年も行ってみようかなと思ってしまう。今年は、スペインのバルセロナで開催されました。

今回の学会発表はなんとoral presentationでしたので、ヨーロッパへ行く道中からずっと頭の中は発表のことでいっぱいでした。飛行機の中や、バルセロナに着いてからもホテルで何度も発表のイメージトレーニングをしました。実際発表当日はなんとかかまわずに話すことはできましたが、会場や、座長の先生方からの質問には、なかなかうまく答えることができず、課題の残る発表となりました。一緒に同行して下さった伊東先生もかなり心配だったようで、日頃よくしゃべる先生が、発表当日はかなり静かな様子でした(ご心配をおかけして、どうもすみませんでした)。



さて、9月のバルセロナは非常に気候もよく、居心地のよい環境でした。今回は昨年よりも1日少ない日程でしたので、なかなか観光もできないのではと思っておりましたが、それなりに有名なところを見ることができました。スペインの観光名所といえば、やはりガウディの建造物で、バルセロナの各所に世界遺産に指定された建造物がありました。そのなかでも、なんといってもやはりサグラダファミリアはなかなか見ごたえのあるものでした。まだ建造物自体は未完成であり、完成するまでになんとあと100年ぐらいはかかるのではとガイドブックに書いてありました。過去、現在そして未来へと多くの人たちが関わって一つの大きな仕事をするを考えると、まさに感無量な気分がしました。



来年は、オランダのアムステルダムで開催されるということです。これからまた日々精進して研究の成果を発表できたらと思っています。そして、今回の発表には呼吸器グループの先生方を含め、多くの先生方にご指導、ご鞭撻をいただき誠に有難うございました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

奨励賞受賞のことば

第8回愛媛呼吸循環器病医学研究会

県立今治病院 循環器科 大 下 晃

この度は、第8回愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞を頂き、誠にありがとうございました。私は、「Tomtec imaging systemを用いた3次元OCT画像」という題名で発表させていただきました。OCTは、IVUSで用いられる超音波を近赤外線に置き換えたもので、IVUSの約10倍の分解能を有していると言われておりますが、実際はじめて冠動脈内のOCTをみたときは感動ものでした。鮮明に血管内の構造物がうつしだされ、病理組織をみているかのような印象をうけました。これを3次元化しようなどとは、私の頭には全くなかったのですが、あるとき松岡先生がつぶやいたのです。「これ、3Dにしたら面白いやろなあ。」(そりゃ、おもしろいやろうけど…)さて、ここからが大変でした。幸い当院にはIVUSの3次元化をしていたころのTomtec imaging systemというソフトがあったため、新たにソフトを購入する必要はなかったのですが、OCTのデータをそのソフトにもっていくことから始まり色々と障害がありました。私はコンピューターに詳しくないので、川上先生やTomtecの会社の方に手助けしていただきながら、苦勞の末になんとかOCT画像の3次元化に成功しました。はじめは1例の解析に4時間くらいかかり、繰り返すごとにスピードは速くなっていきましたが、それでも1例最低40分くらいは必要としました。ただ、作っている間はドラゴンクエストをしているときを彷彿とさせるような面白みを感じながら、あっという間に時は流れました。多数の症例を解析するなかで、最も問題になったのは、冠動脈のmotionによるずれでありましたが、次世代のOCTがでることでこの問題も解消されることがわかりました。今回の検討でOCTの3次元化は正確な血管壁の構造を理解するうえで有用なツールであることが証明され、今後一般臨床に普及される日も近いと思われました。

この松岡先生発案の3D-OCTは、2008年の血管内視鏡学会でベストイメージ賞、2009年のCTC研究会で優秀賞をいただきました。そしてこの度、(1番ほしかった)愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞をいただけたことは大変光栄なことと感じております。今後はこれらの一つでも論文に残せるようがんばっていきたいと考えております。最後にこの研究をサポートしてくださった松岡先生、川上先生をはじめとする県立今治病院の先生方ならびにスタッフの方々に感謝いたします。

研修医奨励賞受賞のことば

日本超音波医学会第20回四国地方会

原 佳 世

平成22年10月2日、徳島市生涯福祉センターで開催された日本超音波医学会第20回四国地方会学術集會に参加し、『Finger-tip Coronary Flow in the Myocardial Bridging』という演題でBest Imaging賞を頂くことができました。今回このような発表の機会を頂いた上に、賞を頂くことができ、非常に光榮に思っています。

私は、愛媛大学の愛プログラムで1年目を済生会松山病院で研修し、今年4月からは愛媛大学附属病院で研修中です。4月から6月の3カ月間、第二内科循環器グループで研修させて頂き、その際に、今回の発表のお話を頂きました。

本番の10日前、直前の学会発表を終え、ようやく超音波学会の発表準備を始めた時、稲葉慎二先生から『Best Imaging賞を取るぞ！』と言われ、賞の存在を知りました。賞を取ってみたいという気持ちはもちろんありましたが、正直なところ最初は、経験も知識も乏しい私に賞を取れる自信は全くありませんでしたし、まずは発表の形を作り、演題内容を理解することで精一杯でした。しかし、稲葉先生がMyocardial Bridgingの基礎からプレゼンテーションの極意まで、非常に丁寧に、非常に熱心にご指導して下さい、短い準備期間ではありましたが、なんとか形にすることができ、できる限りの知識を詰め込むことができました。そして、学会直前、稲葉先生の論文“Usefulness of Transthoracic Doppler Echocardiography for Noninvasive Assessment of Coronary Blood Flow in a Patient with Symptomatic Myocardial Bridging”がEuropean Journal of Echocardiographyにacceptされ、『もう大丈夫だ。自信を持って行って来い！』と送り出されました。このような報告を学会で発表させて頂けることを非常にうれしく思いましたし、当日、稲葉先生は会場に来られないということでしたので、稲葉先生の分まで、聴衆にしっかりと伝え、賞を取って帰ろうと気合いを入れて発表に臨みました。

学会当日は、準備の甲斐あって、出番までの待ち時間も、発表も落ち着いていました。苦手な質疑応答も、今までの発表の中では一番まともに質問に答えられたような気がします。それだけでも今回の発表で得られたものは十分ありましたが、さらに今回はBest Imaging賞という形で評価して頂き、非常にうれしかったです。

今はまだ、演題を用意して頂いて、たくさんの先生方に手厚いサポートをして頂いて、なんとか発表している状態ですが、これから経験と知識を少しずつ積んでいって、いずれは自分の臨床経験や研究内容を学会で発表し、他施設の先生方とディスカッションできるようになりたいです。

最後になりましたが、今回このような貴重な経験をさせて頂き、またご指導して下さいました先生方に心から感謝しております。ありがとうございました。

関連病院業績集

県立今治病院

1. Hideo Kawakami, Hiroshi Matsuoka, Akira Oshita, Tamami Kono, Susumu Shigemi.
A case of a newly developed yellow neointima at stent implanted site one year after sirolimus-eluting stent placement. -Angioscopic findings-.
J Cardiol 54 : 153-157, 2009.
2. Michinobu Nagao, Hiroshi Matsuoka, Hideo Kawakami, Hiroshi Higashino, Teruhito Mochizuki, Akira Ohshita, Tamami Kohno, Susumu Shigemi.
Detection myocardial ischemia using 64-slice MDCT. Comparison with stress/rest myocardial scintigraphy.
Circ J 73 : 905-911, 2009.
3. Michinobu Nagao, Hiroshi Matsuoka, Hideo Kawakami, Hiroshi Higashino, Teruhito Mochizuki, Masahiko Uemura, Susumu Shigemi.
Myocardial ischemia in acute coronary syndrome : assessment using 64-MDCT.
Am J Roentgenol 193 : 197-1106, 2009.
4. 松岡 宏、檜垣實男
循環器疾患治療における禁煙補助薬の意義について
循環器科 66 : 93-101, 2009.
5. 松岡 宏
血管内視鏡の面白さ 心臓血管画像 MOOK 2
監修：児玉和久 産業開発機構株式会社、東京、pp114-118, 2009.
6. 川上秀生、松岡 宏、大下 晃、河野珠美、重見 晋、中村真胤、松本有司、高田泰治、岡山英樹、檜垣實男
血管内視鏡による薬物溶出ステント留置8ヶ月後における血管壁性状の評価
-Sirolimus-eluting stent vs Paclitaxel eluting stent-
日本血管内治療学会誌 10 : 22-28, 2009.

国立病院機構愛媛病院

1. Hironobu Hamada, Kimiko Tsuji, Seigo Miyoshi, Kazunori Irifune, Toshimitsu Suwaki, Yasushi Aibara, Akihiko Yamamoto, Takeru Hirayama, Masahiro Abe, Kazutaka Nishimura, Nobuo Ueda, Naohiko Hamaguchi, Ryoji Ito, Jitsuo Higaki.
A 3-month Evaluation of Once Daily Inhaled Tiotropium for Elderly Patients with Chronic Obstructive Pulmonary Disease.
Therapeutic Research 30, 1483-1490, 2009
2. Makoto Saito, Hideki Okayama, Kazuhisa Nishimura, Akiyoshi Ogimoto, Tomoaki Ohtsuka, Katsuji Inoue, Go Hiasa, Takumi Sumimoto, Jun-ichi Funada, Yuji Shigematsu, Jitsuo Higaki.
Determinants of left ventricular untwisting behavior in patients with dilated cardiomyopathy : Analysis by two-dimensional speckle tracking.
Heart 95 : 290-296, 2009.
3. 濱田泰伸、阿部聖裕、山本昭彦、片山 均、平山 猛、相原 泰、久保克仁、中西徳彦、上田暢男、西村一孝
高齢者肺炎に対するbiapenemの有効性と安全性の検討（愛媛呼吸器感染症研究会）
新薬と臨床58 : 55-62, 2009.
4. 土手純治、橋田英俊、篠原智子、藤岡紀子、西宮由美子、森岡紀勝、船田淳一、岩田 猛
通院による回復期および維持期心臓リハビリテーションへの参加・不参加患者の背景
医療63 : 260-264, 2009.
5. 岡山英樹、池田俊太郎、船田淳一、高田康徳、渡辺浩毅
座談会；心血管イベントを抑制するために ー最近の大規模臨床試験からの知見ー
血圧 16 suppl 1 : 21-27, 2009.

著書

1. 阿部聖裕、西村一孝
V 肺循環の異常 「片側性肺水腫」
呼吸器症候群第2版II
日本臨床、pp221-224, 2009.
2. 阿部聖裕、西村一孝
「肺結核」

泉 孝英 編集

ガイドライン外来診療2009日経メディカル社、pp51-60, 2009.

3. 阿部聖裕、西村一孝

呼吸器疾患「肺結核」

外来診療ハンディガイド (泉孝英 編集) :

日経メディカル開発出版、2009.

4. 阿部聖裕

「運動負荷試験」、「6分間歩行試験」

まんがで読み解く呼吸器症例100 (河野修興 監修) :

メディカルレビュー社、2009.

喜多医師会病院

1. Makoto Saito, Hideki Okayama, Kazushisa Nishimura, Akiyoshi Ogimoto, Tomoaki Ohtsuka, Katsuji Inoue, Go Hiasa, Takumi Sumimoto, Jun-ichi Funada, Yuji Shigematsu, Jitsuo Higaki.

Determinants of left ventricular untwisting behaviour in patients with dilated cardiomyopathy : analysis by two-dimensional speckle tracking. Heart 95 : 290-296, 2009.

2. Saito M, Okayama H, Higaki J.

Coronary flow dynamics associated with ventricular tachycardia in a patient with hypertrophic cardiomyopathy. J Cardiovasc Electrophysiol 20 : 224-225, 2009.

国立病院機構近畿中央胸部疾患センター

1. Ishii H, Trapnell BC, Tazawa R, Inoue Y, Akira M, Kogure Y, Tomii K, Takada T, Hojo M, Ichiwata T, Goto H, Nakata K.

Comparative Study of High-Resolution CT Findings between Autoimmune and Secondary Pulmonary Alveolar Proteinosis. Chest 136 : 1348-1355, 2009.

2. Akira M, Inoue Y, Kitaichi M, Yamamoto S, Arai T, Toyokawa K.

Usual interstitial pneumonia and nonspecific interstitial pneumonia with

- and without concurrent emphysema : thin-section CT findings.
Radiology 251 : 271-9, 2009.
3. Akira M, Toyokawa K, Inoue Y, Arai T.
Quatitative CT in Chronic Obstructive Pulmonary Disease : Inspiratory and Expiratory Assessment.
AJR 192 : 1-6, 2009.
4. Shojima J, Tanaka G, Keicho N, Tamiya G, Ando S, Oka A, Inoue Y, Suzuki K, Sakatani M, Okada M, Kobayashi N, Toyota E, Kudo K, Kajiki A, Nagai H, Kurashima A, Oketani N, Hayakawa H, Takemura T, Nakata K, Ito H, Morita T, Matsushita I, Hijikata M, Sakurada S, Sasazuki T, Inoko H.
Identification of MICA as a susceptibility gene for pulmonary Mycobacterium avium complex infection.
J Infect Dis 199 : 1707-15, 2009.
5. Okada M, Kita Y, Nakajima T, Kanamaru N, Hashimoto S, Nagasawa T, Kaneda Y, Yoshida S, Nishida Y, Nakatani H, Takao K, Kishigami C, Inoue Y, Matsumoto M, McMurray DN, Dela Cruz EC, Tan EV, Abalos RM, Burgos JA, Saunderson P, Sakatani M. Novel prophylactic and therapeutic vaccine against tuberculosis.
Vaccine 27 : 3267-70, 2009.
6. 井上義一、新井 徹、橘 和延、高木理博、北市正則、深水玲子
4急性増悪と肺癌合併. [特集] 特発性肺線維症 (IPF)
医薬ジャーナル45 : 94 (1856)-100 (1862) , 2009.
7. 井上義一、杉本親寿、新井 徹、北市正則、坂谷光則
[特集] 稀少呼吸器疾患をめぐる最近の進歩. 肺ランゲルハンス細胞組織球症
呼吸器科15 : 404-409, 2009.
8. 松村晃秀、井上義一
間質性肺炎に合併した肺癌手術一急性増悪とその予防策. 間質性肺炎と合併症一
医学のあゆみ229 : 598-602, 2009.
9. 井上義一
特集からむ痰、うっとうしい咳. 治療 慢性呼吸不全・COPDに去痰薬は有効か?
JIM. 19 : 44-48, 2009.
10. 井上義一
CASE25. 工務店勤務歴と肺結核の既往があり、労作時呼吸困難を訴えて来院した64
歳男性. New専門医を目指すケース・メソッド・アプローチ8

呼吸器疾患P. 232～P. 243 日本医事新報社2009.

11. 井上 義一

ランゲルハンス細胞組織球症の病態と臨床：総括

日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会雑誌 29：95-97, 2009.

12. 井上義一、石井榮一、森本 哲、平家俊男、三嶋理晃

肺病変を中心としたランゲルハンス細胞組織球症全国調査(小児血液学会HLH/LCH委員会との共同調査)

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班 平成20年度 研究報告書 P. 37-39, 2009.

13. 井上義一、広瀬雅樹、松室昭子、新井 徹、杉本親寿、佐々木由美子、橘 和延、

源 誠二郎、西山明秀、北市正則、審良正則、林 清二、岡田全司、坂谷光則

リンパ脈管筋腫症患者の血清中バイオマーカーの臨床的検討

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班 平成20年度 研究報告書 P. 327-. 331, 2009.

14. 安藤守秀、白木 晶、安部 崇、進藤 丈、片岡竹弘、平山晃介、山口 均、

坂谷光則、井上義一、鈴木克洋

集中治療室における急性期呼吸リハビリテーションの効果

平成20年度 研究報告書 P. 287-292, 2009.

15. 井上義一、広瀬雅樹、松室昭子、新井 徹、杉本親寿、西山明秀、

佐々木由美子、橘 和延、源 誠二郎、岩城洋子、杉山和哉、

中川美紀子、廣畑和弘、審良正則、北市正則、林 清二、岡田全司、坂谷光則

リンパ脈管筋腫症日本人患者に於ける血清Vascular Endothelial Growth Factor-Dの測定厚生労働科学研究費補助金臨床試験推進研究事業

シロリムスによるリンパ脈管筋腫症の第Ⅲ相国際共同臨床 試験 MILES trial に関する研究報告 2008年度研究報告書 P. 24-29, 2009.

16. 井上義一、広瀬雅樹、松室昭子、新井 徹、杉本親寿、佐々木由美子、橘 和延、

源 誠二郎、西山明秀、北市正則、審良正則、林 清二、岡田全司、坂谷光則

リンパ脈管筋腫症患者の血清中バイオマーカーの臨床的検討

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班 平成20年度 研究報告書 P. 327-331, 2009.

17. 井上義一

特発性間質性肺炎の急性増悪に対するPMX-DHP (polymyxin B-immobilized fiber column hemoperfusion) 厚生労働科学研究

特発性肺線維症の予後改善を目指したサイクロスポリン+ステロイド療法ならびにNアセチルシステイン吸入療法に関する臨床研究 平成20年度研究報告書 P. 71-72,

2009.

18. 橘 和延、井上義一、井上 康、西山明秀、杉本親寿、松田能宣、辻 泰佑、佐々木由美子、香川智子、源 誠二郎、松室昭子、広瀬正樹、新井 徹、林 清二、坂谷光則
特発性間質性肺炎の急性増悪に対するPMX-DHP (polymyxin B-immobilized fiber column hemoperfusion) 厚生労働科学研究 特発性肺線維症の予後改善を目指したサイクロスポリン十ステロイド療法ならびにNアセチルシステイン吸入療法に関する臨床研究 平成20年度研究報告書 P. 73-78, 2009.
19. 井上義一
(1) 線維化性特発性間質性肺炎患者の臨床経過に及ぼす治療効果
(2) 特発性間質性肺炎の急性増悪に対するPMX-DHP 療法
厚生労働科学研究 特発性肺線維症の予後改善を目指したサイクロスポリン十ステロイド療法ならびにNアセチルシステイン吸入療法に関する臨床研究 平成18年度～20年度 総合研究報告書 P. 36-38, 2009.

市立宇和島病院

英文原著

1. Ohshima K, Ikeda S, Watanabe K, Yamane K, Izumi N, Ishibashi K, Ohshima K, Hamada M.
Relationship between plaque composition and no-reflow phenomenon following primary angioplasty in patients with ST-segment elevation myocardial infarction -Analysis with virtual histology intravascular ultrasound -.
J Cardiol 54 : 205-213, 2009.

和文症例報告

1. 堀口 愛、池田俊太郎、門田久紀、山根健一、泉 直樹、川副 宏、大島弘世、大島清孝、濱田希臣
失神を契機に発見された未破裂Valsalva洞動脈瘤の1例
日本老年医学雑誌 46 : 259-263, 2009.

著書

1. 濱田希臣
心筋症「薬学生のための新臨床医学」(市田公美、細山田真 編集)(廣川書店)
153-160, 2009
2. 濱田希臣

肥大型心筋症の薬物療法の進歩－Naチャネル遮断薬とHCMの予後－
「心筋症－基礎と臨床：Up to Date」(鄭忠和 編集) (別冊・医学のあゆみ) 89-93,
2009

総説

1. 濱田希臣、泉 直樹、山根健一、大島弘世、石橋 堅、大島清孝、池田俊太郎、
重松裕二
肥大型心筋症の臨床
J Cardiol Jpn Ed 4 : 1-19, 2009.
2. 濱田希臣
1－6) 肥大型心筋症
「患者さんの背景・病態で考える薬の選び方・使い方のエッセンス」
治療 (増刊号) 91 : 787-791, 2009.
3. 池田俊太郎、門田久紀、山根健一、大島弘世、大島清孝、濱田希臣、久保田典夫、
百田光弘、月本裕記
冠動脈不安定プラーク診断の現況－診断モダリティの進歩－
南予医学雑誌 10 : 8-16, 2009.

その他

1. 濱田希臣
早期高血圧を呈する患者に対し、ニフェジピンCRの夕食後追加投与は、24時間の
安定した降圧に有用
Flash Report JSH 2008 : 第31回日本高血圧学会総会記録集 3-4, 2009.

日和田邦男

日本文原著

1. 松浦秀夫、日和田邦男、荒川規矩男
わが国の基幹病院における病院食の食塩含有量に関するアンケート調査結果
血圧 16 : 264-268, 2009.

中国語教科書

1. 柯若儀、日和田邦男 主編
「心内科医師入門必読」
日和田邦男：意外事件及潜在医療事故報告制度
(柯若儀 訳) 同意書 (informed consent)
病人診治流程 (クリティカルパス)
第二診断或第二意見 (セカンドオピニオン)
電子病志 (電子カルテ)

脳死亡和臓器移植（脳死と臓器移植）
Living will 和尊厳死（リビングウイルと尊厳死）
循証医学（EBM）

化学工業出版社、北京、中国、pp288-295, 2009.

日本文著書

1. 日和田邦男
ASCOT-BPLA
小川 聡 監修
DATA UPDATE Cardiovascular 第4版
先端医学社、東京、pp256-258, 2009.

日本文総説

1. 日和田邦男
レニン阻害薬
治療学43：557-560, 2009.
2. 日和田邦男
Renin History in Japan
Therapeutic Research 30：1827-1829, 2009.
3. 日和田邦男
直接的レニン阻害薬開発の歴史
血圧 16：1039-1042, 2009.

その他

1. 日和田邦男
私と高血圧
血圧 16：184-185, 2009.
2. 日和田邦男、檜垣實男（対談）
レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系における
レニンとは：病態生理学的観点から
Nikkei Medical 4月号：144-147, 2009
3. 日和田邦男
トリグリセリドと脳卒中
血圧 16：310-311, 2009.
4. 日和田邦男
レニン阻害薬
TOPIC（SDIC 学術版） No.586：1-2, 2009.
5. 日和田邦男

医想 54 : レニン・アンジオテンシン系にはまって

Pharma Medica 27 : 5-6, 2009.

6. 日和田邦男、野出孝一 (対談)

出会いが導いたRASへの道

Angiotensin Research 6 : 281-288, 2009.

7. 日和田邦男、藤田敏郎 (特別インタビュー)

レニン阻害薬開発の歴史と期待

RAJ Journal 1 : 7-9, 2009.

向井幹夫

1. M Koga, H saito, M Mukai, D Kasayama, T Yamamoto.

Factors contributing to increased serum urate in postmenopausal Japanese females.

Climacteric 12 : 1-7, 2009.

2. Masafumi Koga, Hiroshi Saito, Mikio Mukai, Michio Otsuki, Soji Kasayama.

Serum glycated albumin levels are influenced by smoking status, independent of plasma glucose levels.

Acta Diabetologica 46 : 141-144, 2009.

3. Masafumi Koga, Hiroshi Saito, Mikio Mukai, Soji Kasayama, Tetsuya Yamamoto

Factors that contribute to increased serum urate in menopausal females.

Climacteric 12 : 146-152, 2009.

4. Ito H, Ishi K, Iwakura K, Nakamura F, Nagano T, Takiuchi S , The CALVLOC study Group (including Mikio Mukai)

Impact of azelnidipine treatment on left ventricular diastolic performance in patients with hypertension and mild diastolic dysfunction : multi-center study with echocardiography.

Hypertens Res 32 : 895-900, 2009.

5. Masafumi Koga, Jun Murai, Hiroshi Saito, Mikio Mukai, Soji Kasayama, Yuji Moriwaki, Tetsuya Yamamoto

Close relationship between serum concentrations of 1,5-anhydroglucitol and uric acid in non-diabetic male subjects implies common renal transport system.

Clin Chim Acta 410 : 70-73, 2009.

6. 中村さとみ、奥山幸子、近藤由理、本田葉子、中根 薫、坂口真恵、坂倉三恵子、山岸弘尚、酒井千恵、向井幹夫、古賀正史
特定健診特定保健指導試行における保健指導の有用性について
近畿中央病院医学雑誌 28 : 33-38, 2009.
7. 奥山幸子、金児理絵、堀田明美、中村さとみ、森 敬子、山本多恵子、山岸弘尚、酒井千恵、向井幹夫、古賀正史
人間ドック肥満受診者の1年後の体重推移および減量群における食習慣の変化
近畿中央病院医学雑誌 28 : 21-26, 2009.
8. 上林奈津、池、葉子、奥山幸子、中村さとみ、中根 薫、坂口真恵、坂倉三恵子、向井幹夫、古賀正史
当院で実施した特定保健指導の成績－腹囲の変化に影響する生活習慣病の解析－
人間ドック24 : 61-65, 2009.
9. 古賀正史、村井 潤、斎藤 博、向井幹夫、笠山宗正
血清尿酸値は血清グリコアルブミンに対する負の調節因子であるJ of Metabolic Syndrome 6 : 2-9, 2009.
10. 向井幹夫
頭痛、胸部不快感、食欲不振を訴え来院した45歳高血圧症患者
第89回オンライン症例検討会 (2009. 08. 01)
武田薬品工業 Medical Executive Lounge電子版
<http://www2.takedamed.com/content/index.html>
11. 向井幹夫
エルダーケアチームとは
近中通信 40 : 3, 2009.
12. 向井幹夫
サクセスフル・エイジング (successful aging) を目指して
－メタボリックシンドロームからアンチエイジングへ－
ふれあいひょうご 254 : 8, 2009.
13. 増山 理、向井幹夫、佐藤幸人、上松正朗
RA系抑制薬による治療－大規模臨床試験の知見から－
血圧 16 suppl. 3 : 133-139, 2009.



新入医局員

[自己紹介文]

土居 寿之

本年度、第二内科・循環器グループに入局させていただきました土居 寿之と申します。

愛光高校を卒業後、東京医科大学に進学し、研修から愛媛に戻ってまいりました。愛媛大学・愛媛県立中央病院で2年間の研修を終え、岡山先生・鈴木先生・井上先生をはじめとする諸先生方のご指導に感銘を受け入局させていただきました。一緒に仕事をさせていただいてまだ半年を過ぎたばかりですが、諸先生方の凄さを実感するとともに、自分の実力不足・努力不足を実感しております。

特に指導医である井上先生には多大な労力をおかけしております。早く少しでも戦力になれるように努力しております。

今後とも諸先生方にご迷惑をおかけすることは多々あると思いますが、御指導・御鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

豊 澤 亮

本年度より第二内科呼吸器内科グループの一員として、先生方にお世話になっております豊澤亮と申します。私は九州熊本の出身で、知る人ぞ知る済々黌高等学校を卒業し、1年間の福岡での浪人生活を経て、念願の愛媛大学医学部に入学しました。これも何かの縁と思い、卒業後も地元には帰らずに愛媛大学で1年間、県立中央病院で1年間初期臨床研修をさせて頂きました。卒業時には心臓外科に憧れを抱いていたのですが、実際に診療に携わってみると色々なデータから診断・治療を行う内科に興味を持ち、中でも呼吸器疾患に面白さを感じるようになりました。また、初期臨床研修で第二内科をまわらせて頂いた際に、先生方の診療に対する熱心な姿勢とグループ間を越えた団結力を見て「こういう医師になりたい」と感じ、本年、第二内科に入局させていただきました。入局して9ヶ月が経ち、医局や病棟の雰囲気にも慣れてはきたものの、毎日先生方には迷惑をかけてばかりで本当に申し訳なく思っております。まだまだ未熟な若輩者ではありますが、精一杯努力してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

結婚しました!

三好 誠吾・愛

2010年5月30日にハワイで式を挙げました。

素敵な家庭を築いていきたいと
思いますので、これからもよろしくお
願いいたします。



濱口 直彦・幸子

平成22年6月12日に多数の先生方にお越しいただき、
松山バイサイド迎賓館で結婚式を挙げる事ができま
した。

これからも夫婦力を合わせて頑張ってまいりたいと
思いますので、引き続きのご指導、御鞭撻のほどよろ
しくお願いいたします。



編 集 後 記

今年には日航の破たん、宮崎の口蹄疫や尖閣諸島問題といった深刻な出来事があった一方で小惑星探査機「はやぶさ」の帰還や根岸、鈴木氏のノーベル化学賞受賞といった明るい話題もありました。値上げをきっかけに禁煙したという患者さんの話でたばこ増税の影響を身近に感じます。いろいろあった平成22年ですが同窓会員にとってどのような年であったのか本紙で少しでも感じていただければ幸いです。執筆してくださった先生方におかれましては日々の診療業務、研究でお忙しい中、依頼を快くお引き受けいただき本当にありがとうございました。

広報委員 片山 均、井上 勝次、岩田 猛